様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３８７２

研究課題名（和文）生きられたアナーキズムの文化実践：自律空間の創出とサブシステンス

研究課題名（英文）Cultural practice in the lived anarchism: criating aoutonomous space and subsistence

研究代表者
澁谷　望（Shibuya, Nozomu）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：３０２７７８００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、グローバルなネットワークを形成しつつあるアウトノミア系アナーキズム運動の文化実践的、情動的側面に焦点をあてた。その際、主に日本、アジア、オーストラリアの都市を対象にした。研究によって明らかになったのは、こうした運動の底流には、自己および他者への「ケア」ないし「愛」の感覚が運動の原理として存在することである。この原理は、資本主義社会へのオルタナティヴな社会の原理を示唆するものして捉えることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これらの運動の特徴には「予示的政治」（将来の理想ではなく、今ここの運動において、抑圧のない平等な社会を一時的に実現する）の原理があることが指摘されているが、その底流に自己や他者、そして生活環境・居住空間への「ケア」の感覚（たとえば、都市における反ジェントリフィケーション運動などにみられるような）、そしてサブシステンス（非資本主義的な生活様式）への配慮を重視する文化的特徴を有している。またこの感覚は、これらの運動だけでなく、運動と共鳴する地域社会においても見いだせる。この感覚は、「自立」を原理とする資本主義へのオルタナティヴとなるであろう。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the cultural and affective dimensions of the global anarchist and autonomist movements. We focused in particular on movement networks in urban spaces in Japan, Asia and Australia. Within these networks, we found that activists had a shared sensibility which valued notions of ‘care’ and ‘love’ for self and others. Furthermore, when these movements became engaged in the creation of urban commons, this sensibility carried over into their relationship with their lived environment, for example in anti-gentrification struggles. Nor was sensibility confined to explicitly anarchist and autonomist spaces. Rather, where controversies over urban space became more generalized, a similar sensibility was observed at the local and even at the societal level. In this sense, a shared sensibility which places value on ‘care’ and ’love’ poses an alternative to capitalist principles of ‘independence’ and ‘self-reliance’.

研究分野：社会学

キーワード：アナーキズム　本源的蓄積　サブシステンス　アウトノミア　コモンズ　社会運動

１．研究開始当初の背景

研究を着想の当初、日本において原発事故をきっかけとした反原発運動が大きなうねりを見せ、また、世界ではオキュパイ運動を始めとする、反資本主義、反権威主義運動が高揚していた。デヴィッド・グレーバーが示したように、オキュパイ運動は、反権威主義的な予示的政治などのアナーキズムの原理が浸透していたし、またソーシャル・センター運動など、アウトノミアの影響を受けた運動もその基盤となっていた。反権威主義的な傾向は日本の反原発運動でも見られ、こうした「運動の文化」の広がりと、それを伝播する運動のネットワークが感知された。

アウトノミア運動とは、資本と国家から自律した空間を獲得することを目指す運動であり、1970 年代のイタリアに始まり、その後、欧州、北米、豪州などに広がった（それゆえイタリア語の「アウトノミア」が使われることが多い）。アナーキズムとは、国家に支配された社会とは別様の社会を目指す運動であり、19 世紀のアナーキズム運動に系譜的な出自をもつ。それは当時マルクス主義と対立し、国家権力からも徹底的に弾圧が加えられ、第二次世界大戦後にはほぼ消えたと考えられている。だが 90 年代にグローバル化に反対する人々（多くが若者たち）によるオルタナティヴの模索のなかから「生きられたアナーキズム」として再発見され、アウトノミア運動の潮流と合流した。両者は出自は違うものの、従来の左翼運動（新左翼も含む）が国家権力奪取／変革を志向するのに対して、その志向性が、国家（そして資本）から自律した空間――物理的、社会的、文化的な意味で――を創出することにある点で共通し、互いに収斂しつつある。都市の一角を一時的に占拠し、自律・自治的空間を創出したウォール街占拠はこうした運動の延長にある。一時的に「オルタナティヴ」をいまここでつくり上げようとするこれらの運動の特徴は「予示的政治」、「ナウトピア」と呼ばれることもある。

しかし、こうした新しい運動の高揚と同時進行するかたちで、新自由主義的な社会への不満はティーパーティーなどのポピュリズム運動によっても表明され始めた。ポピュリズムは、世界でも日本でも広がりを見せ、反エリート主義的感情が、反リベラリズム、反民主主義的な方向に接合される傾向が見られた。

そこで本研究は、反権威主義運動とポピュリズム的な運動とのあいだで民衆の情動をめぐるせめぎあいが存在すること――重なり合いがあること――を認めた上で、とくに、反権威主義的運動、とくにアナーキズム的アウトノミア運動の「文化」の特徴を析出することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、90 年代以降、グローバルなネットワークを形成しつつあるアウトノミア系アナーキズム運動の文化実践的、情動的側面に焦点をあて、その特徴を明らかにする。またこれにより、新自由主義的社会秩序に対して、さらにはポピュリズムないしナショナリズム的社会秩序に対するオルタナティブな社会の諸原理を探る。

３．研究の方法

本研究は、運動の当事者（アクティビスト）への聞き取り調査を中心にしたフィールドワークと、理論研究の２つの軸から研究を進めた。

フィールドワークは、日本、オーストラリア、台湾、インドネシアの都市（なかでも東京、シドニー、ウーロンゴン、台北）を中心にした。ただし、特定の場所というより、その場所を結節点とするネットワークを対象にしているため、他の地域、とくに開発予定地（バリ）や軍事基地周辺部（辺野古、高江）など、争点の中心地における調査も試みた。また、在地社会におけるアナーキズムの伝統との共振関係を調べるため、日本や台湾における脱国家的傾向のある民間宗教や文化と、社会運動のハビトゥスの重なりについても調査を行った。これら当事者によって書かれた資料の読解と分析を含む。

理論研究は、現代における本源的蓄積論の再評価を試み、グローバル化を「新しいエンクロージャー」ととらえ、コモンズの取り戻しとして反グローバル化運動を捉え直す、アウトノミア系の理論家――シルビア・フェデリーチ、マッシモ・デ・アンジェリス――の議論を理論的なベースとした。さらに、都市論、とくにグローバル都市論（サスキア・サッセン）とジェントリフェケーション論（ニール・スミス）をこの文脈に位置づけなおした。また、運動における情動の価値に関する諸議論を、上記のコモンズ論の文脈のなかで位置づけ、検討した。アジアにおける在地社会のアナーキズム的文化については、ジェームズ・スコットの山地少数民族研究（とくにゾミア論）を参照した。

これらのフィールド調査に理論研究を突き合わせるために、中間的な総括として、シンポジウム、「魔女とナウトピア――脱資本主義のパラレルワールド」（2017 年）を、最終年度における総括として、2019 年に国際シンポジウム「政治としての愛」（2019 年）を開催した。

運動の当事者の言説は、自己をリフレキシヴに捉えることが多く、それ自体、理論的な要素を多く持つ。とくに本研究の運動の情動的側面に関する研究は、運動当事者の自己理解、当事者の「実践論」から多くの示唆を得た。また、理論研究についても、本研究で参照した理論家の多く――フェデリーチ、デ・アンジェリス――は、彼ら自身、アウトノミア的アクティビストの経歴を持ち、実践と有機的につながっており、理論研究のなかにアクティビストの声を聞

きとることを目指した。このため、情動的側面へのアプローチにおいては、当事者研究的なスタンスで調査を進めた。

４．研究成果

本研究の成果は以下の２点にまとめられる。

(1)都市のコモンズ

本研究はまず、都市コモンズの「下部構造」に注目し、上記地域における反ジェントリフィケーション／反ネオリベラル都市運動を対象にした。これらの都市運動において、アウトノミアおよびアナーキズム運動の影響が見られ、それらの重なり合いを確認できた。そして、これらの運動は、資本と国家のコントロールからの自律を志向し、（一時的なものも含め）さまざまな自律空間――カフェ、インフォショップ、ソーシャルセンター、アーバンガーデンなど――を維持してきた。本研究はこれらの自律空間が、こうした都市運動において、「下部構造」的なコモンズを構成していることを明らかにした。こうした「コモンズ」を、デヴィッド・ハーヴェイにならって「都市コモンズ」と呼ぶことができる。

こうしたコモンズは、運動を支えるものであると同時に、それ自体が運動の掛金となっている。というのは、こうしたコモンズが都市に存在し、運動当事者だけでなく、その周囲の人びとや住民の交流を促し、公共投資の引き上げによる都市空間の荒廃――シャッター街化など――から「都市的なもの」を護っているのであれば、都市コモンズは、（再）開発を進める側にとっては、都市の荒廃からジェントリフィケーション／都市空間の商品化へいたる、「ごく自然な」筋道に対する障害とみなされるからである。たとえば東京オリンピックを前にした行政による野宿者の追い出しや炊き出しの制限は、ジェントリフィケーションのための都市コモンズの破壊をねらっている。本研究は、こうした都市コモンズの意義を、反ジェントリフィケーション運動および都市空間占拠運動の事例から明らかにした。

(2)情動的側面

本研究は次に、こうしたコモンズの創出・維持の運動それ自体、あるいはネットワーク創出それ自体を文化的、情動的側面から検討した――デ・アンジェリスは、この側面を「コモニング」と呼ぶ。本研究は主に、オーストラリアのアクティビストの聞き取り調査と、本プロジェクト主催の国際研究会議を通じ、こうしたコモニングの実践において、自己と他者、あるいは自らの生活環境に対する「ケア」ないし「愛」の感覚の重要性を析出し、「愛」と「ケア」の概念の政治的含意をあきらかにした。これらの概念は、従来の運動においても、「連帯」の概念の傍らに存在していた。また、政治における「愛の喪失」そのものが、「メランコリー」という政治的な含意をはらんでいること、それが「悲しみに基づく戦闘性 sad militancy」を媒介に、ある種の暴力的なマスキュリニティにつながる危険をはらむことが確認された。このことは、他の地域の運動でも確認できた。たとえば台北のある「カフェ」を基盤とした運動ネットワークは、「ひまわり革命」の際、反中国ナショナリズムに抗して、公共空間を開き、ネオリベラリズムの問題を討議しようとした人々による運動であったが、かれらは、「悲しみに基づく戦闘性」を解除することに自覚的であり、公共空間の創出に際して音楽を多用し、またユーモアや創意の感覚――ひまわり革命の際、外の手洗いのそばの空間を占拠したことから自らを自己卑下的に「賤民解放区」と呼ぶなど――に満ちていた。「悲しみに基づく戦闘性」を解除する社会運動の作法は、高江の反基地運動においても見出すことができた。

また、アナーキズム的アウトノミア運動における「ケア」を受け入れる感覚は、反権威主義的傾向を持ちながらも「他者からのケア」を拒否し、「自立」を志向するポピュリズム運動との決定的な違いとなることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① 渋谷　望、資本主義のもう一つの顔――統治技術としての魔女狩り、支援、Vol．9、2019年、197-203

② 渋谷　望、貧者の生み出す富とコンヴィヴィアリティ、福音と世界、査読無し、73巻6号、2018年、12-18

③ 小田原　琳、『キャリバンと魔女』の問い―マルクス主義フェミニズムを再考する、査読無し、福音と世界、73巻5号、2018年、pp．22-27

④ 小田原　琳、シルヴィア・フェデリーチ――労働を人間の手に取り戻す、POSSE，査読無し，38巻、2018年、pp.186-197

⑤ 渋谷　望、　ネオリベラリズムとアントレプレナー化する女性 ――ポストフェミニズム時代における連帯の困難、経済社会とジェンダー、特集論文につき査読無し、2巻、2017年、pp．31-41
http://jaffe.fem.jp/j/wp-content/uploads/2017/09/5-shibuya.pdf

⑥ 渋谷　望、　グローバル都市における価値闘争としてのジェントリフィケーション、日本

都市社会学会年報、特集論文につき査読無し、33 巻、2015 年、pp. 5-20
https://doi.org/10.5637/jpasurban.2015.5
⑦ 渋谷　望、欲望の予示的政治、世界思想、査読無し、42 巻、2015 年、pp. 29-33

〔学会発表〕（計６件）
① 渋谷　望、変容の政治、　政治としての愛／Love as Politics（東京外国語大学）（国際学術会議）、2019 年
② 小田原　琳, Un/learning her rights: the issue of reproduction in the 68 and after in Japan、Words and Violence: Global History of the 1968 Protests in Japan and its Contemporary Meaning (Leiden University)（国際学術会議）、2018 年
③ 小田原　琳、Anti-nuclear Movements and the Concept of 'Motherhood' in Post-War Japan: A Feminist Perspective、Donne Disarmanti / Disarming Women (University of Venice Ca'Foscari)（国際学術会議）、2018 年
④ 小田原　琳、Rights of Women vs. Rights of the Disabled People: Eugenics in Japan after 1968、第 15 回ヨーロッパ日本研究学会大会（国際学会）、2017 年
⑤ 小田原　琳、シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女』を読む、魔女とナウトピア――脱資本主義のパラレルワールド（東京外国語大学）（シンポジウム）、2017 年
⑥ 渋谷　望、アントレプレナー化する女性と NPO――承認の政治をめぐるせめぎあい、日本フェミニスト経済学会大会シンポジウム講演（龍谷大学）2016 年

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：小田原　琳
ローマ字氏名：(Odawara, rin)
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院総合国際学研究院
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70466910

(2)研究協力者
研究協力者氏名：ブラウン　アレクサンダー
ローマ字氏名：(BRWON, alexander)

研究協力者氏名：樋口　拓朗
ローマ字氏名：(HIGUCHI, takuro)

研究協力者氏名：徳永　理彩
ローマ字氏名：(TOKUNAGA, risa)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。